

2014年版のATテキスト正誤箇所・修正箇所（2014.3.7）

○第1巻 アスレティックトレーナーの役割

- ・ P47 右側 下から3行目
(訂正前) 3) 応急処置
(訂正後) 3) 救急処置
- ・ P97 右側 上から23行目
(訂正前) 管理栄養士が行い
(訂正後) スポーツ栄養士や管理栄養士が行い

○第2巻 運動器の解剖と機能

- ・ P23 右側 下から4行目
(改正前) 非対称性緊張性頸反射と対称性頸反射がある。
(改正後) 非対称性緊張性頸反射と対称性緊張性頸反射がある。
- ・ P24 左側 上から1行目
(改正前) 一方で、頸部を屈曲させた際には両上肢の伸展と下肢の屈曲を導き、頸部を伸展させた際には両上肢の屈曲と下肢の伸展を導く反射運動を対称性頸反射と呼ぶ。
(改正後) 一方で、頸部を屈曲させた際には両上肢の屈曲と下肢の伸展を導き、頸部を伸展させた際には両上肢の伸展と下肢の屈曲を導く反射運動を対称性緊張頸反射と呼ぶ。

○第5巻 検査・測定と評価

- ・ P33 左側 上から6行目
(訂正前) 7点満点で4点以上を有すると全身の関節弛緩性があると判断される。このように全身の関節弛緩性があると判定された場合、靭帯損傷や脱臼にも注意が必要となる。
(訂正後) 全身関節弛緩性がある場合には、これら7点満点で4点または5点以上を有するものが多いと報告されている。中島の方法以外にも5項目の測定から判定する Carter and Wilkinson³⁾ の方法や9項目の測定から判断する Beighton らの方法⁴⁾ があるが、これらの測定において高い点数の場合、全身弛緩性が疑われると考え、靭帯損傷や脱臼などに注意が必要となる。

○第6巻 予防とコンディショニング

- ・ P36 右側 上から1行目
(改正前) 7点(項目)中3点(項目)以上可能(陽性)のものを全身的弛緩性ありと判定する。
(改正後) 7点満点で評価を行う。全身関節弛緩性がある場合には、これら7点満点で4点または5点以上を有するものが多いと報告されている。これらの評価点数が高い場合、全身関節弛緩性が疑われると考え、靭帯損傷や脱臼などに注意が必要となる。

・P179 右側 下から3行目

(改正前) 反動や弾みをつけて行うストレッチングで、ブラジル体操とも呼ばれている。一般に同じ動作を8～12回繰り返す。

(改正後) 反動や弾みをつけて行うストレッチングであり、一般に同じ動作を8～12回繰り返す。

○第7巻 アスレティックリハビリテーション

・P164 図VII-E-55 肘関節内側特殊テスト

(改正前) a. ストレッチテスト：他動的に肘関節を背屈させることにより、肘関節回内屈筋群の伸張痛を検査する。
b. 肘回内テスト：抵抗を加えながら回内させると、内側上顆に疼痛が誘発される。
c. 手関節掌屈テスト：抵抗を加えながら手関節を掌屈させると、内側上顆に疼痛が誘発される。

(改正後) a. 手関節掌屈テスト：抵抗を加えながら手関節を掌屈させると、内側上顆に疼痛が誘発される。
b. 肘回内テスト：抵抗を加えながら回内させると、内側上顆に疼痛が誘発される。
c. ストレッチテスト：他動的に手関節を背屈させることにより、肘関節回内屈筋群の伸張痛を検査する。

・P165 図VII-E-57 肘関節外側特殊テスト

(改正前) a. ストレッチテスト：他動的に手関節を掌屈することにより、肘関節回外伸筋群の伸張痛を検査する。
b. 手関節背屈テスト：抵抗を加えながら手関節を背屈させると、外側上顆に疼痛が誘発される。

(改正後) a. 手関節背屈テスト：抵抗を加えながら手関節を背屈させると、外側上顆に疼痛が誘発される。
b. ストレッチテスト：他動的に手関節を掌屈することにより、肘関節回外伸筋群の伸張痛を検査する。

○第8巻 救急処置

・P4 図VIII-A-1 救命の連鎖 図の変更

・P138～140 メディカル・サポーター制度の改稿

※上記変更については「アスレティックトレーナーテキスト修正箇所のご案内」差し替えページ（2014年度版）にてご確認ください。